

09/03/16

ドラマリー・デイニング
銀河鉄道の夜
宮沢賢治

語り1

語り2

ジョバンニ

カムパネルラ

受付

人びと

母

牛乳屋

ザネリ

学者

鳥捕り

老人

燈台守

老人

車掌

老人

青年

青年

男の子(弟・あちやん)

男の子(弟・あちやん)

女の子(姉・かおる)

女の子(姉・かおる)

マルソ

マルソ

カムパネルラの父

カムパネルラの父

一、午後の授業

語り 先生は、黒板に吊した大きな黒い星座の図の、上から下へ白くけぶつた銀河帯のよう

うなところを指しながら、みんなに問をかけました。

先生 「ではみなさんは、そういうふうに川だと云われたり、乳の流れたあとだと云われ

たりしていたこのほんやりと白いものがほんとうは何かご承知ですか。」

語り カムパネルラが手をあげました。それから四五人手をあげました。ジョバンニも手

をあげようとして、急いでそのままやめました。(たしかにあれがみんな星だと、いつか雑誌で読んだのでしたが、このころはジョバンニはあるで毎日教室でもねむく、本を読むひ

まも読む本もないのに、なんだかどんなこともよくわからないという気持ちがするのでし

た。

語り じよさんが先生は早々それを見附けたのでした。

先生 「ジョバンニさん。あなたはわかっているのでしょうか。」

語り ジョバンニは勢よく立ちあがりましたが、立つて見るともうはつきりとそれを答え

ることができないのでした。ザネリが前の席からふりかえって、ジョバンニを見てくすつ

ません。

とわらいました。ジョバンニはもろどぎまぎしてまつ赤になつてしましました。先生がました。

先生 「大きな望遠鏡で銀河をよつく調べると銀河は大体何でしよう。」

語り やっぱり星だとジョバンニは思いましたがこんどもまた答えることができん

語り 先生はしばらく困ったようすでしたが、眼をカムパネルラの方へ向けていました。

先生 「ではカムパネルラさん。」

語り すると、あんなに元気に手をあげたカムパネルラが、やけにもじもじ立ち上つたまま答えができませんでした。先生は意外なようにしばらくじっとカムパネルラを見ていきましたが、急いで

先生 「では。よし。」

語り と云いながら、自分で星図を指しました。

先生 「このぼんやりと白い銀河を大きな望遠鏡で見ますと、たくさんの小さな星に見えるのです。ジョバンニさんそうでしょう。」

語り ジョバンニはまつ赤になつてうなずきました。けれどもいつかジョバンニの眼のな

かには涙がいっぱいになりました。

ジョバンニ 「そうだ僕は知っていたのだ、勿論カムパネルラも知っている、それはいつかカムパネルラのお父さんの博士のうちにカムパネルラといっしょに読んだ雑誌のなかにありました。」

語り それどこでね、カムパネルラはその雑誌を読むと、すぐお父さんの書斎から巨きな本をもつてきて、ぎんがというところをひろげ、まつ黒な貞いいっぱいに白い点々のある美しい写真を一人でのまでも見たのでした。それがカムパネルラが忘れる筈もなかつたのに、またに返事をしなくてるのは、このごろぼくが朝も午后も仕事がつらく学校に出てももうみんなともはまはま遊ばず、カムパネルラをもあんまり物を云わないようになつたので、カムパネルラがそれを知つて氣の毒がつらわざと返事をしなかつたのだ。

語り そう考へるとたまらないほど、じぶんもカムパネルラもあわれなような気がするのでした。

語り 先生はまた云いました。

先生 「ですから、もしもこの天の川があまがほんとうに川だと考へるなら、一つ一つの小さな星はみんなその川の砂や砂利の粒にあたるわけです。またこれを巨きな乳の流れと考へるならもつと天の川とよく似ています。つまりあの星はみな、乳のなかに

細かにのかんでいる脂油の球にもあたるのでです。」

語り そんなら何がその川の水にあたるかと云いますと、それは真空の光をある速さで伝えるもので、太陽や地球もやっぱりそのなかに浮んでいるのです。つまりは私ども天の川の水のなかに棲んでいるわけです。そしてあの天の川の水のなかから四方を見ると、ちょうど水が深いほど青く見えるように、天の川の底の深く遠いところほど星がたくさん集つて見え、したがつて白くぼんやり見えるのです。この模型をごらんなさい。」

語り 先生は申せたくさん光る砂のつぶの入つた大きな両面凸レンズを指しました。

先生 「天の川の形はちょうどこんななのです。いちいちの光るつぶがみんな私どもの

太陽と同じようにじぶんで光っている星だと考えます。

私たるもの太陽がこのほぼ中ごろに

あって地球がのすぐ近くにあるとします。みなさんは夜このまん中に立つてこのレンズの中を見まわすとしてごらんなさい。こっちの方はレンズが薄いのでわずかの光る粒即ち星しか見えないのでしょう。こっちの方はガラスが厚いので、光る粒即ち星がたくさん見え、その遠いのはぼうっと白く見えるという、これがつまり今日の銀河の説なです。そんならこのレンズの大きさがどれ位あるかまたその中のさまざまの星についてはもう時間ですから次の理科の時間にお話します。では今日はその銀河のお祭なのですからみなさんは外へよくそらをごらんなさい。ではここまでです。本やノートをおしまいなさい。」

語り そして教室中はしばらく机の蓋を開けたりしめたり本を重ねたりする音がいっぱいでしたがまもなくみんなはきちんと立って礼をすると教室を出ました。

二、活版所

(T 12)

語り ジョバンニが学校の門を出るとき、同じ組の七八人は家へ帰らずカムパネルラを中心にして校庭の隅の桜の木のところに集まっていました。それはこんやの星祭に青いあかりをこしらえて川へ流す鳥瓜を取りに行く相談しかったのです。

語り けれどもジョバンニは手を大きく振つてどしどし学校の門を出て来ました。

町の家々では(元や)銀河の祭りにいちいの葉の玉をつるしたりひのきの枝にあかりをつけたりいろいろの仕度をしておるのでした。(あるる)

語り ジョバンニは家へは帰らず町を三つ曲つて大きな活版所にはいってゆきました。

小さな平たい函をとりだして、電燈のたくさんついた立てかけてある壁の隅の所へしゃがみ込むと、小さなピンセットであるで粟粒ぐらいの活字を次から次と拾いはじめました。

語り ジョバンニは何べんも眼拭いながら活字をどんどんひるいました。

語り 六時がうつてしまらくたつたころ、ジョバンニは拾つた活字をいっぱいに入れた平たい箱をもといちど手にもつた紙きれと引き合せました。

語り ジョバンニは小さな銀貨を一つ受け取ると、俄かに顔いろがよくなつて威勢よくおじぎをすると、台の下に置いた鞄をもつておもてへ飛びだしました。

語り それから元気よく口笛を吹きながらパン屋へ寄つてパンの塊を一つと角砂糖を一袋買いますと一目散に走りだしました。

三、家

(13)

語り 口の一番左側には空箱に紫いろのケールやアスピラガスが植えてあって小さな二つの窓口は日曜日が下りたままになつてゐました。

語り ジョバンニ「お母さん。いま帰つたよ。工合悪くなかったの。」

語り ジョバンニは靴をぬぎながら云いました。

母 「ジョバンニ、お仕事がひどかつたろう。今日は涼しくてね。わたしはずうつと工合がいいよ。」

語り ジョバンニが玄関を上つて行きますとお母さんはすぐ入口の室に白い巾を被つて寝んでいた。ジョバンニは窓を開けました。

ジョバンニ 「お母さん。今日は角砂糖を買ってきたよ。牛乳に入れてあげようと思つて。

母 「お前さきにおあがり。あたしはまだほしくないんだから。」

母 「三時ころ帰ったよ。みんなそこらをしてくれてね。」

ジョバンニ 「お母さんの牛乳は来ていないんだろうか。」

母 「来なかつたろうかねえ。」

ジョバンニ 「ぼく行つてとつて来よう。」

母 「あたしはゆっくりでいいんだから、お前さきにおあがり。姉さんがね、トマトで何

かこしらえてそこへ置いて行つたよ。」

ジョバンニ 「では、ぼく、食べよう。」

語り ジョバンニは窓のところからトマトの皿をとつて、パンといつしょにしばらしむしやむしやたべました。

ジョバンニ 「ねえお母さん。ぼくお父さんはきっと間もなく帰つてくると思うよ。」

母 「あたしもそう思う。けれどもおまえはどうしてそう思うの。」

ジョバンニ 「だつて今朝の新聞に今年は北の方の漁は大へんよかつたと書いてあつたよ。」

母 「だけどねえ、お父さんは漁へ出ていらないかも知れない。」

ジョバンニ 「きっと出ているよ。お父さんが監獄へ入るような悪いことをした筈がないんだ。この前お父さんが持つてきて学校へ寄贈した巨大的な蟹の甲らだのトナカイの角だの、今だつてみんな標本室にあるんだ。」

母 「この次はおまえにラッコの上着をもつてくるといつたねえ。」

ジョバンニ 「みんながぼくにそれを云うよ。ひやかすように云うんだ。」

母 「悪口を云うの。」

ジョバンニ 「うん、けれども、カムパネルラなんか決して云わない。みんながそんなことを云うときは気の毒そうにしているよ。」

母 「あの人のお父さんとうちのお父さんとは、おまえたちのように小さいときからのお友達だったそうだよ。」

ジョバンニ 「お父さんは、ぼくをカムパネルラのうちへもつれて行つた。あのころはよかつたなあ。学校から帰る途中、たびたびカムパネルラのうちに寄つた。アルコールラムで走る汽車があつたんだ。レールを七つ組み合せると円くなつて、それで電柱や信号標もついていま信号標のあかりは汽車が通るときだけ青くなるようになつていたんだ。だからアルコールがなくなつたとき石油をつかつたら、罐がすっかり煤けたよ。」

母 「そうかねえ。」

ジョバンニ 「いまも毎朝新聞を配りに行くよ。けれども、いつでも家中まだいんとしているよ。」

母 「早いからねえ。」

ジョバンニ 「ザウエルという犬がいるよ。しつぽがまるで第三のようだ。ぼくが行くと、鼻

を鳴らしてついてくるよ。今夜はみんなで烏瓜のあかりを川へながしに行くんだつて。きっと犬もついて行くよ。」

母) 「そうだ。今晩は銀河のお祭だねえ。」

ジョバンニ) 「うん。ぼく牛乳をとりながら見てくるよ。」

母) 「ああ、行っておいで。川へはほいらないでね。」

ジョバンニ) 「ぼく、岸から見るだけなんだ。一時間で行つてくるよ。」

母) 「もつと遊んでおいで。カムパネルラさんと一緒になら心配はないから。」

ジョバンニ) 「きっと一緒にだよ。窓をしめて置こうか。」

母) 「ああ、どうか。もう、涼しいからね。」

ジョバンニ) 「では一時間半で帰つてくるよ。」

語り ジョバンニは立つて窓をしめ、お皿やパンの袋を片附けると、靴をはいて勢いよく暗い戸口を出ました。

四、ケンタウル祭の夜

本
は

語り ジョバンニは、口笛を吹くようなさびしい口付きで、檜のまっ黒にならんだ町の坂を下りて来た。坂の下に大きな一の街燈が、青白く立つていました。

語り ジョバンニが太股にその街燈の下を通り過ぎたとき、ザネリがえりの尖った新しいシャツを着て、電燈の向う側の暗い小路から出て来ました。

ジョバンニ) 「ザネリ、鳥瓜ながしに行くの。」

ザネリ) 「ジョバンニ、お父さんから、らつこの上着が来るよ。」

語り ジョバンニは、ぱつと胸がつめたり、そこら中きいんと鳴るように思いました。

ジョバンニ) 「何だい。ザネリ！」

語り ジョバンニは高く叫び返しましたが、ザネリは向うのひばの植つた家の中へはいつていきました。

ジョバンニ) 「ザネリは、どうしてあんなことを云うのだろう。ぼくがなんにもしないのに。」

語り ジョバンニは、さまざまの灯や木の枝で、すがりきれいに飾られた街を通って行きました。

語り 時計屋の店には明るくネオン燈がついて、一秒ごとに石でこされたふくろうの赤い眼が、くるくるつくりとうございたり、いろいろな宝石が海のような色をした厚い硝子の盤に載つて星のようにゆつくり循つたり、また向う側から、銅の人馬がゆつくりこつちへまわつて来たりするのでした。そのまん中に円い黒い星座早見が青いアスパラガスの葉で飾つてありました。

語り ジョバンニはわれを忘れて、その星座の図に見入りました。

語り それはひる学校で見たあの図よりもずっと小さかつたのですが、その日と時間に合せて盤をまわすと、そのとき出ているそらがそのまま橢円形のなかにめぐつてあらわれるようになつて居りや。そのまん中に上から下へかけて銀河がぼうとけむつたような

りましん。

刻

絃
9

銀河

ま

ま

帶になつて、下の方ではかすかに爆発して湯気でもあげているように見えるでした。

語り またそのうしろには三本の脚のついた小さな望遠鏡が黄いろに光つて立つていました。
じたし いちばんうしろの壁には空じゆうの星座をしきな獸や蛇や魚や瓶の形に書いた大きな図がかっていました。

ジヨバンニ (ほんとうにこんなよきな蝎だの勇士だのそらにぎっしり居るだろうか)

語り あほくはその中をどこまでも歩いて見たい) ジヨバンニはしばらくぼんやり立つて居ましたが、俄かにお母さんの牛乳のこと

を思いだして、ジヨバンニはその店をはなれました。そして、きゅうくつな上着の肩を気にしながら、わざと胸を張つて大きく手を振つて町を通つて行きました。

語り 空気は澄みきつて、まるで水のように通りや店の中を流れましたし、街燈はみなまつ青なもみや楕の枝で包まれ、電気会社の前の六本のプラヌスの木などは、中澤山の豆電燈がついて、ほんとうにそこらは人魚の都のように見えました。

語り 子どもらは、みんな新らしい折りたたみ着物を着て、星めぐりの口笛を吹いたり、「ケンタウルス、露をふらせ。」と叫んで走つたり、青いマグネシヤの花火を燃したりして、たのしそうに遊んでいました。

語り ジヨバンニは、いつか町はずれのポプラの木が幾本も幾本も高く星ぞらに浮んでいるところに来ていました。そここの牛乳屋の黒い門を入り、牛の匂のするうす暗い台所の前に立つて帽子をぬいで声をかけました。

ジヨバンニ「今晚は、」

語り 家の中はしいんとしています。

ジヨバンニ「今晚は、ごめんなさい。」

語り ジヨバンニはまづすぐに立つてまた叫びました。すると、しばらくたつてから、年老つた人が、どこか工合が悪いようにそろそろ出て来て「何か用か」と云いました。

ジヨバンニ「あの、今日、牛乳が僕んとこへ来なかつたので、貰いにあがつたんです。」牛乳屋「いま誰もいないで、わかりません。あしたにして下さい。」

語り その人は、赤い眼の下のどこを擦りながら、ジヨバンニを見おろして云いました。ジヨバンニ「おつかさんが病気なんですから、今晚でないと困るんです。」牛乳屋「ではもう少したつてから来てください。」

ジヨバンニ「そうですか。ではあります。」

語り ジヨバンニは、お辞儀をして台所から出ました。

語り 十字になつた町のかどを、まがろうとしましたら、向うの橋へ行く方の雑貨店の前で、黒い影やほんやり田舎ヤツが入り乱れて、六七人の生徒らが、口笛を吹いたり笑つたりして、めいめい鳥瓜の燈火を持ってやつて来るのを見ました。

語り その笑い声も口笛も、みんな聞きおぼえのあるものでした。ジヨバンニの同級の子供もだつたのです。ジヨバンニは思わずさきつとして戻ろうとしましたが、思い直して、一そう勢よくそつちへ歩いて行きました。

ジヨバンニ「川へ行くの。」

語り ジヨバンニが云おうとして、少しのどがつまつたように思つたとき、ザネリがまた叫びました。

ザネリ 「ジョバンニ、らつこの上着が来るよ。」

語り すぐみんなが続いて叫びました。

子どもたち「ジョバンニ、らつこの上着が来るよ。」

語り ジョバンニはまつ赤になつて、もう歩いているかもわからず、急いで行きすぎようとした。そのなかにカムパネルラが居たのです。カムパネルラは氣の毒そうに、

がまつて少しわらつて怒らないだろうかというようにジョバンニを見ていました。

語り ジョバンニは、遁げるようにその眼を避けました。カムパネルラのせいの高いが

たちが過ぎて行つて間もなく、みんなはてんで口笛を吹きました。

語り 町などを曲るとき、ふりかえつて見ましたら、ザネリがやはりふりがえつて見ていきました。そしてカムパネルラもまた、高く口笛を吹いて向うにぼんやり見える橋の方へ歩いて行つてしまつたのでした。

語り ジョバンニは、なんとも云えずさびしくなつて、いきなり走り出しました。

五、天気輪の柱

語り 敷場のうしろはゆる丘にはなつかしい。ジョバンニは、小さな林のこみちを、

どんどんのぼつて行きました。まづくらな草や、いろいろな形に見えるやぶのしげみの間を、その小さなみちが、一すじ白く星あかりに照らしだされておわたりです。

語り そのまま黒な松や樺の林を越えると、俄かにがらんと空がひらけて、天の川がむらさきと南から北へ亘つてゐるのが見えました。頂の天気輪の柱も見わけられたのでした。

語り ジョバンニは、頂の天気輪の柱の下に来て、どかどかするからだを、つめたい草に投げました。

語り 風が遠くで鳴り、丘の草もしすかにそよぎ、ジョバンニの汗でぬれたシャツもつめたく冷されました。ジョバンニは町のはずれから遠く黒くひろがる野原を見わたしました。

語り から汽車の音が聞えてきました。その中にほたくさん旅人が、萃果を剥い

たり、わらつたり、いろいろな風にしていると考えますと、ジョバンニは、もう何とも云えずかなしくなつて、また眼をそらに上げました。

語り ジョバンニ「ああ、あの白いそらの帶がみんな星だというぞ。」

語り ところが、よく見ていてもその空は星。先生の云つたような、がらんとした

冷たいとこだとは思われませんでしょ。見れば見るほど、そこは小さな林や牧場やらある

野原のように考えられて仕方なかつたのです。

語り ジョバンニは青い琴の星が、三つにも四つにもなつてちらちら瞬き、脚が何べんも出たり引つ込んだりして、とうとう草のようによく延びるのを見ました。また、眼の下の町までがたくさんの星の集りか、一つの大きなけむりのよう見えました。

語り ジョバンニはすぐうしろの天気輪の柱が三角標の形になつて、螢のよう、べかべか消えたりともつたりするのを見ました。

六、銀河ステーション

語り それはだんだんはつきりして、いま灼いたばかりの青い鋼の板のような空の野原に、まっすぐに立ちました。

語り するとどこかで「銀河ステーション」、「銀河ステーション」というふしぎな声がしたと思うと、いきなり眼の前が、ぱっと明るくなりました。

ジョバンニは、思わず何べんも眼を擦りました。

語り 気がついでみると、さつきから「ごとごとごとごと」、ジョバンニの乗っている小さな列車が走りつづけていたのでした。ジョバンニは、夜の軽便鉄道の、小さな黄いろの電燈のならんだ車室に、窓から外を見ながら座っていたのです。車室の中は、青い天蚕絨を張った腰掛けが、まるでがら明きて、向うの鼠いろのワニスを塗った壁には、真鍮の大きなぼたんが二つ光っていました。

語り すぐ前の席に、ぬれたようにまつ黒な上着を着た、せいの高い子供が、窓から頭を出して外を見ているのに気がきました。肩のあたりが、どうも見たことのあるような気がして、誰だかわかりなくて、たまらなくなりました。

語り こっちも窓から顔を出そうとしたとき、俄かにその子供が頭を引っ込みて、こっちを見ました。それはカムパネルラだったのです。

語り ジョバンニ「カムパネルラ、きみは前からここに居たの」と云おうと思つたとき、カムパネルラが云いました。

語り カムパネルラ「みんなはね、ずいぶん走つたけれども、遅れてしまつたよ。ザネリもね、ずいぶん走つたけれども追いつかなかつた。」

語り ジョバンニは、「そうだ、ぼくたちはいま、いつしょにさそつて出掛けたのだ」とおもいながら云いました。

ジョバンニ「どこかで待つていようか？」

カムパネルラ「ザネリはもう帰つたよ。お父さんが迎いにきたんだ。」

語り カムパネルラは少し顔いろが青ざめて、どこか苦しいというふうでした。ジョバンニも、なんどどこかに何か忘れたものがあるというような気持ちがしてしまいました。

語り ところがカムパネルラは、もうすっかり元気が直つて、窓から外をのぞきながら勢よく云いました。

カムパネルラ「ああ、しまつた。ぼく、水筒を忘れてきた。スケッチ帳も忘れてきた。けれど構わない。もうじき白鳥の停車場だから。ぼく、白鳥を見るのは、ほんとうにすきだ。川の遠くを飛んでいたつて、きっと見える。」

語り カムパネルラは、円い板のようになつた地図をぐるぐるまわして見ていました。

語り その地図の立派なこと、夜のよりまつ黒い盤の上に、停車場や三角標、泉水や森が、いちいち青や橙や緑や、美しい光でちりばめられてありました。ジョバンニはなんだが、その地図をどこかで見たようにおもいました。

ジョバンニ「この地図はどこで買ったの。黒曜石ができるねえ。」

語り ジョバンニが云いました。

カムパネルラ「銀河ステーションで、もらつたんだ。君、もらわなかつたの。」

ジョバンニ 「ぼく、銀河ステーションを通ったろうか。いまぼくたちの居るところ、ここだらう。」

語り ジョバンニは、「白鳥」と書いてある停車場のしるしの、すぐ北を指しました。

カムパネルラ 「そうだ。おや、あの河原は月夜だらうか。」

語り ジョバンニがそつちを見ますと、青白く光る銀河の岸に、銀いろの空のすすきがあるまるでいちめん、風にさらさらさらさらさられて、波を立てていて、波を立てているのです。

ジョバンニ 「月夜でないよ。銀河だから光るんだよ。」

語り ジョバンニははね上りたいくらい愉快になつて、足をこつこつ鳴らし、窓から顔を出して、高く高く星めぐりの口笛を吹きながら一生けん命延びあがつて、その天の川の水を、見きわめようとしたが、はじめはどうしてもそれが、はつきりしませんでした。

語り カムパネルラ 「けれど、だんだん気をつけて見ると、そのきれいな水は、ガラスよりも水素よりもすきとおつて、ときどき眼の加減か、ちらちら紫いろのこまかかな波をたてたり、虹の

ようにぎらつと光つたりしながら、声もなくどんどん流れ行き、野原にはあつちにもこつちにも、燐光の三角標があつくしく立っていたのです。(まる)(まる)

語り 遠いものは小さく、近いものは大きく、遠いものは橙や黄いろではつきりし、近いものは青白く少しかすんで、或いは三角形、或いは四辺形、あるいは電や鎖の形、さまざまにならんで、野原いっぱい光つていてました。

語り ジョバンニはときどきして頭をやけに振りました。するとほんとうに、そのきれな野原中の青や橙や、いろいろかがやく三角標も、てんでに息をつくように、ちらちらゆれたり顛えたりしました。(まる)(まる)

ジョバンニ 「ぼくはもう、すかり天の野原に来た。この汽車石炭をたいていないねえ。」

語り ジョバンニが窓から左手をつき出して前の方を見ながら云いました。

カムパネルラ 「アルコールか電気だろう。」

語り その小さなきれいな汽車は、春のすすきの風にひるがえる中を、天の川の水や、

三角点の青じろい微光の中を、ごとごとごと、どこまでもどこまでも走つて行くのでした。

語り カムパネルラが、窓の外を指さして云いました。

カムパネルラ 「ああ、りんどうの花が咲いている。もうすっかり秋だねえ。」

語り 線路のへりになつたみじかい芝草の中に、月長石でも刻まれたような、すばらしい紫のりんどうの花が咲いていました。

ジョバンニ 「ぼく、飛び下りて、あいつをとつて、また飛び乗つてみせようか。」

カムパネルラ 「もうだめだ。あんなにうしろへ行つてしまつたから。」

語り カムパネルラが、そう云つてしまわないうち、次のりんどうの花が、いやぱいに光つて過ぎて行きました。

語り 次から次から、たくさん黄色を底をもつたりんどうの花のコップが、湧くように雨のよう、眼の前を通り、三角標の列は(けむるように燃えるように)、いよいよ光つて立つたのです。(まる)(まる)

カムパネルラ 「おつかさんは、ぼくをゆるして下さるだらうか。」

語り カムパネルラがいきなり、思い切ったように、急きこんで立ち去るがち云いいました。

語り ジョバンニは思いました。

(ああ、そうだ、ぼくのおつかさんは、あの遠いやつの方のようを見える橙いろの三角標のあたりにいらっしゃって、いまぼくのことを考えているんだつた。) カムパネルラ「ぼくはおつかさんが、ほんとうに幸になるなら、どんなことでもする。けれども、いつたいどんなことが、おつかさんのいちばんの幸なんだろう。」

語り カムパネルラは泣きだしたいのを一生けん命こらえているようでした。ジョバンニはびっくりして叫びました。

語り ジョバンニ「きみのおつかさんは、なんにもひどいことないじゃないの。」

カムパネルラ「ぼくわからない。けれども、誰だつて、ほんとうにいいことをしたら、いちばん幸なんだねえ。だから、おつかさんは、ぼくをゆるして下さると思う。」

語り カムパネルラは、なにか決心しているように見えました。

七、北十字とプリオシン海岸

語り 俄かに、車のなかが、ぱっと白く明るくなりました。見ると金剛石や草の露やあらゆる立派さをあつめたような、きらびやかな銀河の河床の上を水は声もなくかたちもなく流れ、その流れのまん中に、ぼう

つと青白く後光の射した一つの島が見えたのでした。

語り その島の平らないただきに、眼もさめるような立派な白い十字架が立つて、凍つた北極の雲で鑄たといつたらいいか、すきつとした金いろの円光をいただいているのでした。

人びと 「ハルレヤ、ハルレヤ。」

語り 前からもうしろからも声が起きました。ふりかえつて見ると、車室の中の旅人たちは、みなまつすぐに着物のひだを垂れ、黒いバイブルを胸にあてたり、水晶の珠数をかけたり、どの人もつましく指を組み合せて、そつちに祈つてゐるのでした。

語り 二人も立ちあがりました。カムパネルラの頬は、まるで熟した苹果のあかしのようにうつくしくかがやいて見えました。

語り 島と十字架とは、だんだんうしろの方へうつって行きました。

語り それもほんのちょっとの間、川と汽車との間は、すすきの列でさえぎられ、白鳥の島は、二度ばかり、うしろの方に見えましたが、じきもうずうつと遠く小さく、絵のようになつてしまい、またすきがざわざわ鳴つて、どうとうすっかり見えなくなつてしましました。

語り ジョバンニのうしろには、いつから乗つていたのか、せいの高い、黒いかつぎをしたカトリック風の尼さんが、まん円な緑の瞳を、じつとまづまづと落して、まだ何か(とばか声かが、そつあかゆ伝わつて来るのを、虔んで聞いていたらしい)ように見えました。語り 旅人たちはしづかに席に戻り、二人も胸いっぱいのかなしみに似た新らしい気持ちを、何気なくちがつた語で、そつと談し合つたのです。

カムパネルラ「もうじき白鳥の停車場だねえ。」

改小説

ジョバンニ「ああ、十一時かつきりには着くんだよ。」

シグナルの緑の燈と、ほんやり白い柱とが、ちらつと窓の外を過ぎ、それから硫黄のほのおのようなくらいぼんやりした転てつ機の前のあかりが窓の下を通り、汽車はだんだんゆるやかになつて、間もなくプラントホームの一列の電燈が規則正しくあらわれ、それがだんだん大きくなつて、白鳥停車場の大きな時計の前に来てとまりました。

秋の時計の盤面の青く灼かれたはがねの二本の針が、くつきり十一時を指しました。

「三十分停車」と時計の下に書いてありました。

みんなは一ぺんに下りて、車室の中はがらんとなつてしましました。

ジョバンニ「ぼくたちも降りて見ようか。」

カムパネルラ「降りよう。」

二人は改札口へかけて行きました。改札口には、紫がかった明るい電燈が一つ点つ

いているばかり、駅長や赤帽らしい人の影もなかつたのです。

二人は、停車場の前の、水晶細工のようだけ見る銀杏の木に囲まれた、小さな広場に出ました。そこから幅の広いみちが、まつすぐに銀河の青い光の中へ通つていました。

さきに降りた人たちは、どこへ行つたかもう一人も見えません。

二人が肩を

をならべて白い道を行きますと、汽車から見えたきれいな河原に來ました。

カムパネルラは、きれいな砂を一つまみ、掌にひろげ、指できしきしさせながら云いました。

カムパネルラ「この砂はみんな水晶だ。中で小さな火が燃えている。」

ジョバンニ「そうだ。」

どこでぼくは、そんなこと習つたろうと思ひながら、ジョバンニもほんやり答えました。

河原の礫は、みんなすきとおつて、水晶や黄玉や稜から霧のような青白い光を出す鋼玉やらでした。

ジョバンニは走つて渚に行つて、水に手をひきました。銀河の水は、水素よりももつとすきとおつていたのです。

それでもたしかに流れいでいたことは、二人の手首の、水にひたつたところが、少し

水銀いろに浮いたように見え、その手首にぶつつかつてできた波は、うつくしい燐光をあげて、ちらちらと燃えるように見えました。

川上方を見ると、すすきのいっぱいに生えている崖の下に、白い岩が運動場の

よう平らに川に沿つて出でていました。

そこに小さな五六人の人かげが立つたり屈んだり、何か掘り出すか埋めるかして

いるらしく、時々にかの道具が、ピカツと光つたりしました。

ジョバンニ・カムパネルラ「行ってみよう。」

二人は走りだしました。その白い岩になつた処の入口に「プリオシン海岸」と、

瀬戸物のつるつるした標札が立つて、向うの渚には、ところどころ、細い鉄の欄干も植えられ、木製のきれいなベンチも置いてありました。

カムパネルラが不思議そとに立ちどまつて、岩から黒い細長いさきの尖つたく

のみの実のようなものを眺めました。

カムパネルラ「おや、変なものがいるよ。くるみの実だよ。そら、沢山ある。流れて来たんじゃない。岩の中に入ってるんだ。」

ジョバンニ「大きいね、このくるみ、倍あるね。」

カムパネルラ「早くあそこへ行つて見よう。」

語り「二人は、ぎざぎざの黒いくるみの実を持ちながら近よつて行きました。」

語り「たんだん近付いて見る。力のせいの高い、ひどい近眼鏡をかけ、長靴をはいた。」

学者らしい人が、手帳に何かせわしそうに書きつけながら、鶴嘴をぶりあげたり、スコープをつかつたりして、三人の助手や、い人たちに夢中でいろいろ指図をしていました。

学者「そのその突起を壊さないように。スコープを使いたまえ、スコープを。おつと、少し遠くから掘つて。いけない、いけない。なぜそんな乱暴をするんだ。」

語り「見ると、白い柔らかな岩の中から、大きな青じろい獸の骨が、横に倒れて潰れたという風になつて、半分以上掘り出されていました。気をつけて見る。」

は、蹄の二つある足跡のついた岩が、四角に千ばかり、きれいで切り取られて番号がつける。されで、昔はたくさん居たさ。」

語り「この大学士らしい人が、眼鏡をきらつとせず、こつちを見て話しかけました。」

学者「君たちは参觀かね。くるみが沢山あつたろう。それはまあ、ざつと百二十万年ぐらい前のくるみだよ。ごく新らしい方さ。ここは百二十万年前、第三紀のあとのころは海岸でね、この下からは貝がらも出る。いま川の流れているところに、そつくり塩水が寄せたり引いたりもしていたのだ。このけものかね、これはボスといつてね、おいおい、そつるはしはよしたまえ。ていねいに鑿でやつてくれたまえ。ボスといつてね、いまの牛の先祖で、昔はたくさん居たさ。」

ジョバンニ「標本にするんですか。」

学者「いや、証明するに要るんだ。ぼくらからみると、ここは厚い立派な地層で、百二十万年ぐらい前にできたという証拠もいろいろあがるけれども、ぼくらとちがつたやつからみてもやっぱりこんな地層に見えるかどうか、あるいは風か水やがらんとした空かに見えやしないかということなのだ。わかつたかい。けれども、おいおい。そこもスコープではいけない。そのすぐ下に肋骨が埋もれてる筈じゃないか。」

大学士はあわてて走つて行きました。カムパネルラが地図と腕時計とをくらべな

がら云いました。

カムパネルラ「もう時間だよ。行こう。」

語り「ジョバンニ、ああ、ではわたくしどもは失礼いたします。」

語り「そうですか。いや、さよなら。」

学者「大学士は、また忙がしそうに、あちこち歩きまわつて監督をはじめました。二人

は、その白い岩の上を、一生けん命汽車におくれないように走りました。ほんとうに、風のように走れたのです。息も切れず膝もあつくなりませんでした。」

語り「こんなにしてかけるなら、もう世界中だつてかけれると、ジョバンニは思いました。」

語り「間もなく一人は、もとの車室の席に座つて、いま行つて来た方を窓から見ていました。」

ました。

八、鳥を捕る人

鳥捕り「ここへかけてもようございますか。」

がさがさした親切そうな大人の声が、二人のうしろで聞えました。

語り 語り 語り 分けて肩に掛けた、赤髪のせなかのかがんだ大でした。

ジョバンニ「ええ、いいんです。」

語り ジョバンニは、少し肩をすぼめて挨拶しました。その人は、ひげの中でかすかに微笑いながら荷物をゆつくり網棚にのせました。ジョバンニは、かくかくさびしいようなかなしいような気がして、だまつて正面の時計を見ていました。ずうつと前の方で、硝子の笛のようものが鳴りました。汽車はもう、しづかにうざいでいたのです。

語り カムパネルラは、車室の天井を、あちこち見ていました。

語り 汽車はもうだんだん早くなつて、すすきと川と、かわるがわる窓の外から光りました。

赤ひげの人がおずおずしながら訊きました。

鳥捕り「あなた方は、どちらへいらっしゃるんですか。」

ジョバンニ「どこまでも行くんです。」

鳥捕り「それはいいね。この汽車は、どこまでも行きますぜ。」

カムパネルラ「あなたはどこへ行くんです。」

語り カムパネルラが、いきなり、喧嘩のようにたずねましたので、ジョバンニは、思わずわらいました。

語り すると、向うの席に居た、尖った帽子をかぶり、大きな鍵を腰に下げた人も、ちらつとこっちを見てわらいましたので、カムパネルラも、つい顔を赤くして笑いだしてしまいました。ところがその人は別に怒ったでもなく、頬をぴくぴくしながら返事しました。

鳥捕り「わっしはすぐそこで降ります。わっしは、鳥をつかまえる商売でね。」

カムパネルラ「何鳥ですか。」

鳥捕り「鶴や雁です。さぎも白鳥もです。」

カムパネルラ「鶴はたくさんいますか。」

鳥捕り「居ますとも、さつきから鳴いてまさあ。聞かなかつたのですか。」

カムパネルラ「いいえ。」

鳥捕り「いまでも聞えるじやありませんか。そら、耳をすまして聴いてごらんなさい。」

語り 二人は眼を挙げ、耳をすました。ごときと鳴る汽車のひびきと、すすきの風との間から、ころんころんと水の湧くような音が聞えて來るのでした。

ジョバンニ「鶴、どうしてとるんですか。」

鳥捕り「鶴ですか、それとも鷺ですか。」

ジョバンニ「鷺です。」

鳥捕り「そいつはな、雑作ない。さぎというものは、天の川の砂が凝つて、ぼおつとできました。」

るもんですからね。そして、始終、川へ帰りますからね。川原で待つていて、鷺がみんな、脚をこういう風にして下りてくるとこを、そいつが地べたへつくかつかないうちに、ぴたつと押さえちまうんです。するともう鷺は、かたまって安心して死んじまいます。あとは押し葉にするだけです。

ジヨバンニ「鷺を押し葉にするんですか。標本ですか。」

鳥捕り「標本じゃありません。みんなたべるじゃありませんか。」

カムパネルラ「おかしいねえ。」

鳥捕り「おかしいも不審もありませんや。そら。」

語り その男は、立つて網棚から包みをおろして、くるくると手ばやく解きました。

鳥捕り「さあ、ごらんなさい。いまとつて来たばかりです。」

ジヨバンニ・カムパネルラ「ほんとうに鷺だねえ。」

語り まつ白な北の十字架のよう光る鷺のからだが、十ばかり平べつたくなつて、黒い脚をぢぢめて、浮彫のようにならんでいためです。

カムパネルラ「眼をつぶつてるね。」

語り カムパネルラは、指でそつと、鷺の三日月がたの白い瞼つた眼にさわりました。

鳥捕り「ね、そうでしよう。」

語り 鳥捕りは風呂敷を重ねて、またくるくると包んで紐でくくりました。ジヨバンニ

は誰がいつたいここらで鷺なんぞ喰べるだろうと思ひながら訊きました。

ジヨバンニ「驚はおいしいんですか。」

鳥捕り「ええ、毎日注文があります。しかし雁の方が、もつと売れます。雁の方がずっと柄がいいし、第一手数がありませんからな。そら。」

語り 鳥捕りは、また別の方の包みを解きました。すると黄と青じるとまだらになつて、

なにかのあかりのようにもかる雁が、ちょうどさつきの鷺のようくちばしを揃えて、少し扁べつたくなつて、ならんでいました。

語り 鳥捕りは、黄いろな雁の足を、軽くひっぱりました。するとそれは、チヨコレートでもできているように、すつときれいにはなれました。

鳥捕り「こつちはすぐ喰べられます。まあどうぞおあがりなさい。」

語り 鳥捕りは、それを二つにちぎつてわたしました。ジヨバンニは、ちょっと喰べてから思いました。

ジヨバンニ「なんだ、やつぱりこいつはお菓子だ。チヨコレートよりも、もつとおいしけけれども、こんな雁が飛んでいるもんか。この男は、どこかそこらの野原の菓子屋だ。けれどもぼくは、このひとをばかにしながら、この人のお菓子をたべているのは、大へん

気の毒だ。」とおもいながら、やつぱりぼくぼくそれをたべていました。

カムパネルラ「鷺の方はなぜ手数なんですか。」

語り カムパネルラは、さつきから、訊こうと思っていたのです。鳥取りはこつちに向

き直りました。

鳥捕り「それはね、鷺を喰べるには、天の川の水あかりに、十日もつるして置くかね、そうでなけあ、砂に三四日うずめなければいけないんだ。そうすると、水銀がみんな蒸発して、

喰べられるようになるよ。」

カムパネルラ「こいつは鳥じやない。ただのお菓子でしよう。」

語り カムパネルラが、思い切つたとてうように尋ねました。

鳥捕り 「そうそう、ここで降りなけあ。」

語り 鳥捕りは、何か大へんあわてた風で、立つて荷物をとつたと思うと、もう見えなくなっていました。

ジョバンニ・カムパネルラ「どこへ行つたんだろう。」

語り 二人は横の窓の外をのぞきましたら、たつたいまの鳥捕りが、黄いろと青じるの、うつくしい燐光を出す、いちめんのかわらははごぐさの上に立つて、まじめな顔をして両手をひろげて、じつとそらを見ていたのです。

ジョバンニ「あすこへ行つてる。ずいぶん奇体だねえ。きっとまた鳥をつかまえるとこだねえ。汽車が走つて行かないうちに、早く鳥がおりるといいな。」

語り と云つた途端、がらんとした桔梗いろの空から、さつき見たような鷺が、まるで雪の降るよう、ぎやあぎやあ叫びながら、いっぽいに舞いおりて來ました。するとあの鳥捕りは、すっかり注文通りだというようにほくほくして、両足をかつきり六十度に開いて立つて、鷺のちぢめて降りて來る黒い脚を両手で片つ端から押えて、布の袋の中に入れるのでした。すると鷺は、螢のように、袋の中ではしばらく、青くぺかぺか光つたり消えた。りしていましたが、しまいともじもじみんなぼんやり白くなつて、眼をつぶるのでした。語り 鳥捕りは二十疋ばかり、袋に入れてしまうと、急に両手をあげて、兵隊が鉄砲弾にあたつて、死ぬときのような形をしました。

語り と思つたら、もうそれは鳥捕りの形はなくなつて、ジョバンニのとなりで、まきおぼえのある声がしました。

鳥捕り 「ああせいせいた。からだに恰度合うほど稼いでいるくらい、いいことはありませんな。」

語り 見る鳥捕りは、とつて來た鷺を、もうきちんとそろえて、一つずつ重ね直していくのでした。

ジョバンニ「どうしてあすこから、いっぺんにここへ來たんですか。」

語り ジョバンニが、なんだかあたりまえのよなら、あたりまえでないような、おかげな気がして聞いました。

鳥捕り 「どうしてつて、来ようとしたから來たんです。ぜんたいあなた方は、どちらからおいでですか。」

語り ジョバンニは、すぐ返事しようと思つましたけれども、さあ、ぜんたいどこから來たのか、どうしても考へつけませんでした。カムパネルラも、顔をまつ赤にして何か思い出そうとしているのでした。

鳥捕り 「ああ、遠くからですね。」

語り 鳥捕りは、わかつたと/or いうように雑作なくうなずきました。

九、ジョバンニの切符

老人 「もうここらは白鳥区のおしまいです。ごらんなさい。あれが名高いアルビレオの観